

內外新報

18
59
3L



内外新報

第三三號

定價八分



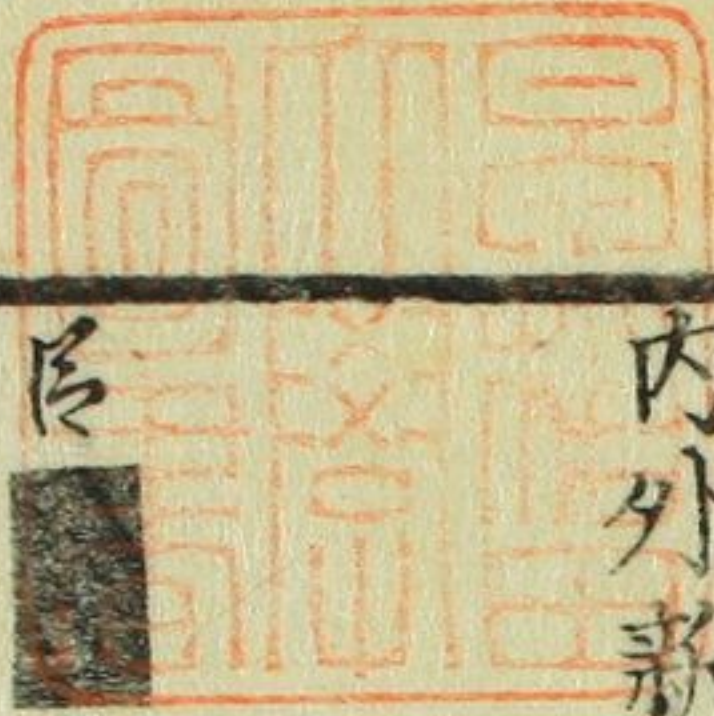
寧
59
子

内外新報第三十三號

慶應四年五月六日

○或る一諸侯の建白

臣 忠愷頓首謹言 陛下は昔言上りて尚春徳川□□連
日強旗は祭砲し其状明白に敵方より上りて親を敵下と
以て征東節との所を以て流津進軍を以て以て之を以
て所を向ふ所草木披靡は均しく大小侯伯敢て抗命以
たりし由若くは其大旗の下に呼援ありて 固東天險の二
嶺より強由吾人の境を踏む如く一吏も支吾不仕に所
敵系之士民も悉く歎息を在 天裁は從ひ□□を水



戸表に退身祖先創業の首城を安き國大守護の兵器を
長出し奉祀首冠の家来ども 勅命に應じまじと罰し
勅命謹守仕 天戈は血ぬくをしく清繼責の清純意連
月を歩んじておまいた何故にぞ如此計速容易い外
皇威煥發終らしむるとも中あがく冥東の士民積衰の
解留を承け固循倫生節義の風由地をたらしひひのへし
や又たまはせ罷り伏し 王所の抗を感れし心名分の
奈まづつらざらぬ知て内服降伏仕しを以て外世未
かろ方今

主上幼冲天下の大政二之陪臣の手又あま 王政優古

い口実としそ実の私利を尊む征東の清名義を敵の罪
状を寛恕不慮の義と輿論もこれをあうそ上積年の覇
業久しくた平又慢進と氣振るはひとも敵軍の兵を
節操をせふくそえやし秘く称又徳川家の事を祖家風
又撫でるは休し多ぶの艱難をりてく天下を凶惡を
め億萬の生靈を憐毒の中より救ひ竟に仁寿の域に
せふ末出百六十餘年の間 朝廷にも深く清依頼る
遊累代其馬の 大権を委任はるは上も 皇位清其
寧下の儀兆を平の化又治しそ功徳今者人々も固結以
るしそ之の家連枝の儲藩のそ子孫血統の親族後代

願の儲藩を南討忠勇熟臣の後以ていへば宗家又仇し
 之宗又教し以て系を思ひがとぎ節以て後令一旦 王命
 の已む以て以て軍列に加りて以て其情実天日
 に対し以て面目を有とまじく人々正及し復し以て上へ
 復名の陰向背の勢ひ素より針でがくく以て徳川旗本
 の兵隊を駆り兵器軍仗を以て居りて以て改定
 賸費□□自々指揮以て二三仇怨の藩を相承取究を
 嗣下は所へ衡を中系と争ひ以て十分出来や致く迄
 了ん 皇國の兵禍已まじく釀しを幸百善の生害を望
 望は若しめ内比紛争しそ弁夾之虚隙に安じ 皇國令

既の一缺を生じ以て極く及又至る以てハ但宗以来積
 年為 王の誠意以て居りて以て其く者懼以て其く為
 洞伏兒の紛伝之情寧を論せ以て姑く生罷又依し附衆の
 表を替りて其者怨を致し其夢を才佛ちり入り其恭順後信を
 尽し其居或つても厚く諭し以て戒め百方若んを極め其
 管 朝廷公明正大の事成を以て以て故漢代法藩
 ありび又士民とも依違交し難く 王所へ鎮撫を以て
 おその通し容易し事成功お成り以て其れを以て其れを
 其れを寛典を以て其れを家名順承とも舊モトのごとく其れを
 是□□其れを其れを其れを其れを其れを其れを其れを其れを

仕てくくたもそくゆくの世にを恭順民を以素望と懸
 しいり出来がくく関東く清言並瓦解とお成り終りい
 東苑も政府と姿をわし生民の膏血國中に流ぎ兵變の
 天体む時有く百安かく脱走多し支兵と攻守し區・鞅
 掌ひ多しい系た 王師の大典を要領を故ざる系ひく
 ひ系た打く 皇武を黷しいくゆ了り者寛典の正言を
 不結 然出因循仕ひへむ宿憤然い系窮兵突出寛を
 関下よ海へいやうておた燭照龜卜の如くよ存らる
 誓討く撤令寔よ以く不家く此大事に係るい此場合を
 其有く將□□系た生憂と塗炭よりくめ 皇國の乱

階を生しゆてを 皇徳へ對し其思入い激衷をりくく
 罪名の曲直第一言不其怨慕皆其存立で恭順の終りか
 ちく缺典をく 王師よあわくを清威典已におきいを
 寛典の 然出き是もあく大兵府下よ寄屯せしめ私
 情を恣あく市民を商賣の利を失ひ農民の耕耘の危を
 失ひ物力彫耗して人生無初を極り者舊も随く疲弊し
 ちよび終りい人心怨嗟離叛の念を起し 王政清仁恤
 の序類まいつぐまよこ是を正い外と怪く平を思き不
 がく其あく事件の通正者かよ此言をこまけりよく清
 閑兵お成いやう仕てくく金津素名を地 於憲よかく

そのりの除罷は 仰出四所安堵の上今津美の二家へ
忠の座は賞しおぬいとも懐綏遠大の御親模の忠
孝徳節は維持の一端は相成て人倫は杖のわね
皇位もお叶ひ了る右の御徳切屏營忌諱をかんて
みま言上の殊は誠惶頓首死罪

国四月

□□□□

右或るひの佐賀侯の建白ありと未詳

○又月報日出板ダイムス新聞抄伏

予カ土曜日午後二大約して布告せし □□公せし

兼び大権を握しむる新聞抄しも疑ふなきは
おとろく文面ハ 街門より王居への御沙汰を傳せ
あり

此間ハ 大君御府へ御沙汰せらるる才女六号は出
多れを省

お文より考ふる世は兼び御軍職をば立てざる
御しませし御沙汰は長州を陸軍監督長州を海軍監督
に任せしこと御記載せし又推考するよ □□公
ハ外國交際の職に任せし

□□公使の御府へし終るとは違は貿易を盛

せんは専力あるべし

最下を平と維持するの命儀終了三週目候より清交
を振南方は布衣あるべしと聞せしと聞せしと聞せしと
故確報を仰て忠告せん

內外新報

第三十四號

定價八分



内外新報第三十四號

慶應四年五月十二日

○仙臺采沢古澤寺に於て、諸侯一達、以て其
 以て紙に於て、陸奥守、兵部大納言、津安堵、津延、
 先鋒、等、討陸奥守、等、致し、陣、以て、今、般、密、保、家、来、共
 陣、門、に、相、越、し、陣、伏、謝、罪、し、等、致、し、中、出、し、以て、討、津、衆、津、
 安、以、間、津、衆、殺、し、内、白、石、陣、所、に、可、し、津、出、張、相、成、以、採、
 度、以、以、上

同日月日

上杉謙正大弼家老

竹俣義純

千坂左郎左衛門

伴達陸奥守家老

但求土佐

坂 英力

○鎮撫府參謀公發成平藩への津達書四通

奥州平藩

右先等々熱智府へ至津河津相成以付命。熱智人殺す
る十日申以白川迄之。若熱以事
但近地以対相高々人殺す。若出右至利々者。成丈
相前々強装以之出張。有之事

同日月七日

鎮撫府

參謀

○同十五日

平藩

右今日上里舍境に悉入甲子道在廻番付候了致事
但求小隊宛出張之事

○同十六日

平藩

右今日上里白川宿奥州入口警隊了致事
但大砲走門備付以事

○同十九日

平藩

右之段に出張人数一先引元以極申付以比左白川を
人之付急巻出張了有之事

○奥州上里出府之者吐し

一 同月上旬之に薩州船多人敷乗但仙基サガ寒風サワ浪港へ入
津古里船合之艘紫ぎ所へ薩長筑之藩の人敷を登く
上陸し紀藩相跡し船富以多し以し
一 九条殿下是と容賢堂へ侍在事之案同同月和旬新侍
殿江引福と相成り此と方勢を人中附添身之仙基人

敷以て警備せしむ

同月中旬より仙基以て沢之位殿上里米沢と重役侍呼
出し以て付合之義此後侍清以相成固之沢殿速振
上方勢引率以て米沢に侍出陣と重役侍より及
人新出令般付合此後侍清の仕以比ども一併付合
の竹鼓以てや警備一日疑惑仕以米沢にと此方人敷
以て相固め以て西人敷願内へ侍入以て不及中以
有相重以部之等有之右に付沢殿速又天童に侍入り
のし

十日又日少以鎮撫使醍醐少将殿白川に侍入城

十七日以仙臺南越、軍勢白川と引く、仙臺、白
石を退陣す

○後四月廿三日、出警城、其の來帖

去る十六日、甲子道、モ、イ作として相越、泰謀方附勝見、長太
丈附法會、藩基場より、モ、イ出張、モ、イ大砲打出せ
モ、イ至丈より、内路志、名子村と十折、モ、イ會津見張所、有之、右
場、モ、イ不_レ以_レ、双方、モ、イ銃戰、モ、イ相成、モ、イ打、モ、イ泰謀、モ、イ兵、モ、イ中、モ、イ怪、モ、イ我、モ、イ人、モ、イ為
モ、イ卒、モ、イ之、モ、イ夜、モ、イ入、モ、イ内、モ、イ陣、モ、イす

同十九日、モ、イ是、モ、イ九、モ、イ以、モ、イ之、モ、イ妻、モ、イ藩、モ、イ上、モ、イ之、モ、イ使、モ、イ者、モ、イと、モ、イ以、モ、イ之、モ、イ會、モ、イ藩、モ、イ世、モ、イ人
往、モ、イ柏、モ、イ村、モ、イ白、モ、イ川、モ、イ判、モ、イ程、モ、イと、モ、イ出、モ、イ張、モ、イ之、モ、イ中、モ、イ紙、モ、イし、モ、イ以、モ、イ存、モ、イ即、モ、イ刻、モ、イ白、モ、イ川、モ、イ城

へ、モ、イ存、モ、イ出、モ、イ泰、モ、イ謀、モ、イ方、モ、イ付、モ、イへ、モ、イ相、モ、イ吐、モ、イし、モ、イ以、モ、イ雪、モ、イつ、モ、イづ、モ、イき、モ、イも、モ、イ打、モ、イ拂、モ、イひ、モ、イ以、モ、イ極
中、モ、イ聞、モ、イ勿、モ、イ論、モ、イ道、モ、イ時、モ、イ會、モ、イ藩、モ、イ降、モ、イ伏、モ、イ歎、モ、イ歎、モ、イ中、モ、イの、モ、イ答、モ、イ之、モ、イ付、モ、イ押、モ、イ穿、モ、イ以、モ、イ答
ハ、モ、イ有、モ、イ之、モ、イる、モ、イ處、モ、イと、モ、イ泰、モ、イ謀、モ、イ附、モ、イ江、モ、イ中、モ、イ以、モ、イよ、モ、イし

之、モ、イ妻、モ、イ藩、モ、イ三、モ、イ百、モ、イ人、モ、イ從、モ、イ 會、モ、イ津、モ、イ津、モ、イ蔵、モ、イ入、モ、イ甲、モ、イ子、モ、イ道

二、モ、イ本、モ、イ松、モ、イ藩、モ、イ百、モ、イ人、モ、イ從、モ、イ 江、モ、イ戸、モ、イ口

泉、モ、イ藩、モ、イ四、モ、イ十、モ、イ人、モ、イ從、モ、イ 石、モ、イ川、モ、イ口

平、モ、イ藩、モ、イ八、モ、イ十、モ、イ人、モ、イ從、モ、イ 梨、モ、イ抄、モ、イ入、モ、イ口

白、モ、イ川、モ、イ城、モ、イ中、モ、イ二、モ、イ本、モ、イ松、モ、イ柵、モ、イ倉、モ、イ泉、モ、イ兵、モ、イ薩、モ、イ長、モ、イ籠、モ、イ人、モ、イ殺、モ、イ臥、モ、イ人、モ、イ人
陣、モ、イ以、モ、イく、モ、イ相、モ、イ固、モ、イす

同、モ、イ廿、モ、イ日、モ、イ曉、モ、イ六、モ、イツ、モ、イ時、モ、イ色、モ、イ會、モ、イ津、モ、イ勢、モ、イ中、モ、イ以、モ、イく、モ、イ甲、モ、イ子、モ、イ乃、モ、イ関、モ、イ門、モ、イ之、モ、イ妻、モ、イ勢

へ付かへる時時戦卒城中より参謀を人騎馬以て馳
付指揮以多し以ゆとも遂に敗走し及びまより平勢
の関門に掛り以多し又敗れ寄手速様城中に目がけ
裏表より参謀并に代官を殺す之命に免れずといひ
以ゆを多し以ゆ切也以ゆ中代官の行故
の悪し以ゆ相分る事申す代官の才多し砲發防禦以
多し以ゆとも短兵急に攻詰り以ゆ人思て空を打戦し
以ゆの多し以ゆ走人も申す以ゆ者多し其内城中六ヶ所
放火し大勢城人相見以ゆ是の最末より同謀者以
ゆ居り以ゆ遂に落城し相成り参謀以下少少のつぎ

由仙臺に退去し執鎮極使り以方相分り以ゆといひ
以ゆ府より平層屯所より出小隊繰出し持城固め以ゆ
以ゆ形く参謀付仙臺に居り堅健次と申す者存り其端
以ゆ方六七人木産より發砲し戦卒及び以ゆとも
怪我人無く退り参謀付あり其後來り指揮以多し
内人救引揚八里程退き小平村へ一泊廿二日陣せ
り長層参謀世良修徳の戦卒の一支部仙臺に引返
り古介参謀某戦卒と柳倉人と組付有る最初戦以ゆ
参謀殿を打た多し舍人肩を以負り以ゆ引組り以ゆ
の参謀と多し戦見付り以ゆ來り以ゆ舍人と切殺し以

中儲蓄素より付金々々念々々々少くあり一時は決取し且
双方強丸を打上げ死傷等文に争々々々の事四々々々時
頃め々々々々引拂ひ城中々々々々人居合々々々々勢之四々々
人々々々々々中々々々々々焼坊不々々々々々中々々々々々刻柵倉
落滅々々々々官軍の跡兵遊蕩々々々々付金々々々々攻
向ひ々々々々々々々々々々

內外新報

第三五號



内外新報第三十五號

慶應四年五月九日

○高松侯への 御沙汰書

其方家来共在坂中尚正月三日後不容易時然又之別
 以柳葉對 朝廷如何之儀由有之掃相聞へ此止官位入
 系退付也 仍出少々其方に於ては在國中以て毛取存
 知悉く早急に以て不徳川□□上系に付家来共兵狼警
 衛に付存登るに途中伏見表に於て混亂中 官軍と
 以不相無得て誤砲仕に次第其也又大不敬之罪を以て
 出以て重臣小吏兵庫小河又在幕門殊戮を加へ首級を

出し將軍宮へ歎新仕の者素より 朝廷に於て忠勤
 を受し中なる心慮に有る付罪之道相立ぬ候儀申出
 以に付格別と思食を以て 固食届不日以固東返付
 と申出候 天朝の爲忠勤を擧ぐ実効を顯すに於て
 其功勞に依り前罪所宥免て相成陸奥へ所沙汰有
 申有るに依り右出兵の儀已了海陸諸人較沙汰相成
 居小事に付所軍費金調敵は是実効相立居候に勿論
 前出候家来不束とい候中悉く大義順遂を不申出
 才全の家来共い示方不届に相違り候事に付此等
 所答に 終付に処格別寛大に所仁惠を以て謹慎を

免官位は復し來條以て國論一定轉て了勵忠勤極
 所沙汰候事

但此類 官軍裁率以多し家来共所置候事本支沙
 寛大に旨執り準し隊長以上を之に者死一考を減し
 永禁固に事なきに既し重臣兩人を刑に事し以
 上其其餘悉く刑法に事なきに及らば候事
 附呈有るに申す不持既砲を發せ沙汰揚候 終付に來
 右改官代軍防事務局へて申出候事

○福島より來候事

一 同日廿五日廿六日廿七日以薩長彦根大垣等へ官軍凡

六百余人余義抄白川和坂宿上を押寄せ間坐すに
 大我事と相成り官共寂初と縁を以て勝利と相見
 へい守會兵一曰奮我官軍方敗る野邊と引退き死
 傷致すれを會津方生捕ふ捕ふと有る全く勝利に
 く者十七級相さるしに會兵死六十八人手負百
 八十二人双方とも死傷約ありに
 一仙基層石門大和と介とも二千人程廿七日郡山へ看
 白門へ出陣し執跡と有る七千人許り同不人傑出
 たり成りし一福島と関門相建仙基獨傳あり官
 兵と改め教重と事と山麓に薩長督同不意に或十人


余仙基へ討ありしに

一九末殿の白石沢殿の山形所在及び中事礎礮殿に
 何方より在り相分天童山形を屯在し官軍へ
 仙基とを兵を差向けたり執りしに

或人の依り野村大田系の藩医官軍の教とに
 警急返出張怪我人療治し中凡二百人余ありと云

遠藤但馬守の通村下板橋平尾加勢侯の邸内に宿陣
 し元沙代官所八万二千石の地の公事を司るを
 官より命せしむしが世に物強しきり付悪徒共農

商を擄まはるゝは押入を劫奪とある者殺る多きは
何所由農商寺集を其防の用意の者なきに心掛つと
ど程月々も其時終つて然るに去月十日午後其時
郡下土佐田村俵窪とある所の農家へ歩兵極の者六
人押し入令子若出まぢく執強凌又及びし又若く用
意の事ありを近邊の者ども手早く其仗を引き伏走
せ集りしは歩兵思もよく逃出せしと追かけ上練馬
村六門山とある所以て二人打死一人農家へ匿ま
して生捕りし人の逃去ありしは早速に遠者
族の陣所へ逃出りしは町刻検使来り生捕り人とも

陣所へ連りしれ一役人衆の後居跡を其洞洞海立
守りし農家へ茶代として令武米を置きしとを農人
一門諸事簡易多しを感し悦びしとあり
四ッ谷西念寺の所化傍  あり者四月中逃走し岩
井戦争の苦を人の討死し多しを人の通時某隊の内
に居り中又當節緑山シバの傍徒六十八人逃走し死隊は
養を居りし一かゝる豪僧も其の許るありと云ふ
きを

○

け長に戸市中に掃て官軍方人殺し勤めらるゝと

と成りたり

本月二日不駐が谷津嶺硝薬へ官軍土少勢はく警固せし実行者もるゝ多人殺来り談判有るそ其節かく同遠に相成りたり

同日官軍方津使上野へ参らるる役の人と山内へ入る徒者の廣小路常樂院六阿弥院のち供侍す

四日五日越中崎遠はく官軍方大砲發放有るはしり砲聲夥しく聞ゆは日の黒田勢ありとぞ

同日橋本少將敵馬上風杉鳥帽子符衣はく東叡山に出入り騎馬六七騎の供奉せし督府の津使ありと

いふより 既前人殺言護あり

或は四ヶ越敵將もいふ同日八ツ時を以て形をきり

○

世に本御意の仕立職人あり白地直密ヒタレやうの物あるはくらく居るとの風聞あり行きの注文ありやまゝに何の入用るる也

但又不人前ありとの噂あり信偽相分るべ

○又月四日津書付の家

と據津初年と美正村津後及し美松平確堂殿へ津ん

此社在之極 大熱督府上之社 俗出以競也有之也
以付也頼之と取以乃為之故向之へて之也

卷之五

內外新報

第 三六 號

定價 八分



Vertical text on the right edge of the right page, likely a library or collection stamp.

内外新報第三十六號

慶應四年五月十二日

○英法如何抄譯

「ウイレルム王治世大元法律定まる國民は自由を以てせしめしが未だ新聞紙は付く沙汰はなごきせし然るは高貴の新聞紙は極まるは甚だ自在なり」
「高貴あることと記さるるごとくも實事を記さるる妨げありしは由る平を妨げ名分を破る人を難きせしむる浮説を去るべきなり」
「但しつゝのやある後何れをも私に記者を罪なきをわらば其筋へ作

へ曲直を云々

カニニ先生曰く新聞紙中より勅善懲惡よあらざるを
公記あるを知らざるものた英國の法正大公昭不
る代知らざる者といふ

○同日月廿七日書付字

榊原式部左補使者

従本録市右兵衛門

右 上様水戸表は御謹慎に付御機嫌御伺として先
出に於回安を願湯大久保一宿

○同日月廿九日陸軍局へ書付し書付字

私と黨と結び兵隊と隊名を設け先其を以て 兵出
以て執中有り少少陸軍局の内上り彰義隊兵士の隊
へ兵隊本役を統し相加里又先十合と上叙と黨を結
び以て者有り我と相聞へ以ての介と事以て右極と我
不相成以て百生陸支配向く者へ着せり新中後兵は且
是迄彰義隊兵へ加里居り以て者へ行ても小善清入中
後し清抱の者へ是才一代小善清入中後以て百生兵
兵個中其の中聞は但支配向く者夫と見とて以て身中
是なり自然情実を通じ強き下上は右極成りき以て
以ての不相合に付強く是とも有り以て新忌畏を

保あふべ十ふとせぬへ十ふの板に結ば

四月

○ 又月七日肥前勢之院隊二大隊をど部将二騎菊の侍
級の旗を本白軍中隊の旗を本つがきも西洋風ある
と云ふは押立夕七の半時迄本丁通を通行し候は
りしと云ふは出陣令の門請官出立し

○ 四月六日七日前後東叡山に河故、相よりいふは
山内と教書にわたりて存立し又対門ありとの大

以悲怖致居由

○ 四月廿日若菜初りの来帖写

一 先以沙甚多く通て不日二条城に

仍幸に相成り東方町通を上りていふは相成町家
夫と精宅と風吹と沙塵に

一 正月末上系と沙旋本在御世昔家系為元調は相成り
高家中系振交代守合朽木振はかきその中いふは
又幾江が西園節沙知は有るいふは先甚とのころに
上知は 修舟者居るに候に相成居いふは元調と上
の本候は優し候に相成り候に西を候はともあはれ

法_二沙_一能_レ以

一古改官も今以て法多指以て又法制定す諸侯方
を城の方由二本道具先箱等法持てせし方多ふ有
て是上法振き多ふ有て或は法遊歩者以て又礼
界との相見へ不_レヤ

○八月二日四月付より法の書

上極田安法形は 法引極法に付法及人出仕
退出とも表門一方通行事
但法度向て是近く通也

下馬所

一 田安法門以長巻西南角矢来陸

一 清水法門外

一 此指法門内極端角矢来陸

右へ通也

○同日三日法書書

極へ助極法事

上極と法称

上極法事

若上極と法称有は相違し

右は法旗本法家人同士限り上は系以て地より

對以涉林岬以を無くし方自地を差別不混振了致
有向くは下社其い

又月

一市中巡邏之勢甚く官軍方以く上致以守是迄
仍付並に巡邏清免と成り

存く通是若く巡邏仍付並に向くへ相違以万了
以て之を以物くハ途中險小銃等相撃へ往來致を万受
以

又月

一城中修了むる官軍大小砲筒練以多し以有

大慈誓府より社務出以方向へ下社其い

又月

○

上総水戸津多原より一揆起り鎮靜の爲めに戸よりも
退り出張又相成りよりハかある深くや未だ生電統
を以て此日確報を以て次篇に記載を志し

○上総之藩に御達書

小栗上野介近日其地の上総檀田村よりわろく陣所者
以相據へ加へ砲甚と築き不容易の企有り越諸方
に進難聞捨深く加探索以交遂謀判然上ハ其對 天朝

不埒至極下い之人□□恭順之義より相成以て付返捕
之義之儀に付付以向國家之為め同心協力して忠勤
を盡し一子又余に以て子速に陣へて中出以先鋒法隊
を以て一巻殊戦に致事

四月廿二日

東山道總督府

之儀に相承在系元板倉之計改在井鉄丸あり省官也
曰号又載るる事の小栗仁在津門居書とあはれと恭順
せし程も侍藩より之居也次号又出を命ず

百八十一

內外新報

第 三 七 號

定價八分



Handwritten marks or characters on the right edge of the right page.

Handwritten marks or characters on the right edge of the right page.

内外新報第三十七號

慶應四年五月十一日

○小田原の報告

清西侯の世子英二侯彦羽倉園田等或百餘人小田原迄
 に屯をせしが精銳隊數山岳鉄古砲在法極方壯 此討
 去月十七日出立ありて其越説論以多し然も此甲府表に
 おわく儀情ありを以板以屋き同廿二日内府由屋有之
 廿四日多野羽所へ津輕けよ相成以津達書遠近新聞
 才八号又見へあり

○上野桐生よりの來状字

百八十一

一 去月約日官軍先手百人程相生新町山宿
 新宿村角を清助と中者二日官軍通以の節途中以々
 官軍を継傍以多し以又固く馬防より搦捕相生町族
 宿に引立親族を勿論村役人一月款致致以以在
 切圍入を以首を討ち者前日大向の町多為不宿寄に
 之石取以りの五人とも獄門に掛け以清助母傍親
 以多し念佛唱居以不為終懲傷之解程程乱し之入水
 しお果中以

一 足利より半里程相生宿寄又十部村より本家陣を守居
 田某と中者出途生滞之由以之終高表を引立以

事將款致せし以付免し憐者老人程は若加へ引連
 之中以同村入會以之為田大内為陣を守近者某と中
 者是以同終之座あり終高表へ入牢也其前陣を表
 門とを砲發射入也以之

一 大向の山中水治村より星野十夜右衛門ある者以之
 岩鼻支取不允締為終居り家富て平生善く施をせり
 然るに歩兵を匿し意以之疑心以之館林藩某右親
 手とを結し以引連也以款

一 高城に在る以以家聖妙足利戸田家降伏之知り人程
 百人為出先手を命し且又佐野陣を掛合之節和談

不_レ以_レ陣_を明_け後_させ武_を至_る敵_のこ_とに_は凡_も揚_り相_成
りし

或_は説_く之_を招_き武_を号_し載_せし_に脛_林の_いわ_く後_は信_に然_ら
信_に對_し多_くと_この_事件_を指_揮せ_し人_のこ_とを_信に_然
りや_否や

一 又_は日_夕方_は依_り野_の堀_田勢_は百_人程_に宿_り六_日堀_田勢_は出_立
夕_方彦_松勢_は六_百人_程多_く宿_り之_を計_りて_は以_て途_中より
引_返し_しゆ_に介_道の_口に_は以_て相_通せ_りと_す

一 官_軍若_松より_は沼_田へ_は押_掛ひ_續て_は若_松に_ては_は凡_も
堀_田大_砲を_備へ_るを_考へ_る中_國の_いま_を守_りて_は沼_田の

要害_{なる}こ_とを_願地_會津_後に_て會_藩立_入り_居り_風少_く
有_る是_を又_は向_ひ不_しと_共妻_殺に_掛り_て執_りし_に在_り

○補遺

○上総姉ヶ崎の説

去_り月_三日_四日_下総_國和_崎宿_りを_は放_りて_は戰_卒後_は晚_き隊_一
手_に上_総國_へ引_れ不_し井_宿不_し取_村へ_凡人_數之_百人_姉姉_ヶ
が_崎宿_り凡_百五_十人_貝室_村今_馬村_に凡_百五_拾人_宮桑_村
又_凡不_し拾_人程_約合_六百_不拾_人屯_集し_一手_に人_數凡_二
百_不拾_人を_和崎_宿より_は東_へ令_通り_上総_國志_里谷_村真_如
院_へ引_れ世_人殺_戮を_許保_出し_しへ_とも_期又_は後_は以_て其

相聞也同月七日拂曉官軍薩長備前田原兼光佐倉大
村人殺凡之予人同至八幡宮と相進之以節脱走兵士之
内或拵七八人同取石切之官軍之拵七八人討死手控く
引上ケ以以付同軍一門押出し五取村又井宮に攻掛り
戦卒と相成り脱走隊討死之人怪我人不取分戦争勝利
以之ゆへども人数少く以故姉が碇宮の方へ引揚殿と
し之ゆへに上村より屯留せり官軍戦死百餘之拵人手負
百人存有之申上り之予と別走一手の山通り一手の
中通り一手の溪通り押来り先鋒二百人程脱走隊殿付
と相戦官軍六七人討死脱走方二人討死討し右隊の官

系村へ引揚りて官軍の三隊襲ひ来り姉が碇宮出関村
津宮村今為村松が村畑木村以て合戦相成り脱走方死
傷五拾人程隊長某出関村以て腰を斬り自身を掘出し
きんとして死せり官軍部下と士志を掘出し焼耐以て
流し自ら上帯以て巻縛り戸板に繋ぎ退り申上り人
隊丸の中より生捕らる斬首せ給右に通り隊長病を更陣
より直接し兵卒を以て石真り岩村外之ヶ村に引揚り負百
七八拾人々未更津へ立越り亦上り翌八日曉五人力程
之艘以て乗出し以先不相分真里岩村外之ヶ村に引死
以兵隊の日夜救れし内之百人程ハ大妻島城に立入り

翌九日同不出るゝ交敷札之共士所とよ相集り上送
以く加也以者凡六七百人程と相成途中山宿不相分
同十一日以下徳園純子之キテ曰即左邊門方を便り退
去以多し猶船借更なる相頼以以舟小舟以沖也
出来是れ中野里に交け同下以く程又散漫思ひく又引
分を退以中相又官軍の戦死に接八人手負指七八人程
有之去る九日大風多し節吉里若村吉如院并二村上村
以く人家之形放火し真如院に埋有之火炮二挺小銃百
七八十挺同不尋ふ村と有之以狼牙四百俵也分死
也上本更津宿へお移り十一日人殺八百人程同不上

船以く引れ五百人程の同宿に滞在し四百人程の姉が
崎水野日向守陣屋に長巻を放火し分捕不尋多し積
ると上人殺害也同十三日同不出帆引掛ひ三百人程の
陸路又いふ井宿迄上り乗船以く引揚同日迄の滞在の
本更津一子のものよし

七日戦事と節脱走方以く兄の足白玉剣崇也以て弟附
添真如院以く介抱以多し九日迄滞在以交見の剣以く
歩以難出来に討敵之を入也以て自殺す致弟ハ之退
き以中と進め以以く由兄を見去て去也以て先倫理
難相立とよひに候し合以内敵襲ひ来也以に討見を奪

負ひ内院表より先有之にへ隈を居の交官兵見出しあ人
とも斬首のあしに中近村を著こそを聞て皆後候せし
とぞ

一の宮加納遠江守家来とらびに勝浦大目主膳正陣を
造る藩士脱走と申相少申

内外新報

第八號



第八號

第八號

内外新報第三十八號

慶應四年五月十四日

○御家名に依て付是書に款願書

當正月中 上様大坂より御帰城に接る以後 天朝へ
 對し法及心の教を以て問罪の師に及向し由承知仕上
 下惶惑仕由 上様深く所業明法謹懐赤敷云へ所迄
 去在為互只爰所謝罪に 仰立由云へ可 日光所
 門主様法始に法當家内一門兵又重立し法役人より教
 交由款願書存る由 天朝又八一向に許容無之
 遂に 勅使以下向 勅款願然し由 仰立由に付人

公殊々外憫し仕の依之欲く身をお謹く以て来暇に在り
之厚くお守りし根成旗本は家人より市中在りて其も
数交り仰出ま之大い偏り世罪之象民慘酷悲愁之痛
之無し根に思食の依冠を次第に奪ひ引續水府表
へ内閣居内閣軍機院木より一より遠有るに所道
春より出実をそむる為、ハ全く天朝へ對し秋毫之
所二心無し出依を明白にせし尊慮と深く存忍入
右に付依向より過激の後論未中より起るは其
更に出採用せし只管の恭順に依て其期より其為盡
上ハ兼て、仰出の通り所蒙るに依り後亦其收納寫

等可也 仰出ハ必然に依り日く一回に渴望仕及是全
く清其暇貫徹し其実効を希望の故より存り下思
上様清答し願ふに在りて、天朝におあり、神祖以
来亦百余年其治國の以て大功をとり捨るに依り決
りて間亦必社稷是保るの通り依然多る、所由治り
この事々々、其今日に至るより一而く寛大し其実
跡を以て族下し去せハ勿論其民より其より依り其
あからしむる根に其要並りてハ益然と懐問し其を以
煽動を起る形より退く程多人数はなから奮兵激卒
固結し解する事不至り、天朝の御仁意と齟齬仕終り

天下強援外夷圖嗣仕 皇國危殆之生靈蒙を失ふる至
り及ハ必然之勢ニ涉るハ何卒此後所洞察ニ成下
大勅督軍へテ 仰立速ニ上下安堵仕テ根奉親ハ左外
ハモ一旦所蒙之由為を謀リ脱走仕テ安堵ノ帰向有る所
我得たり 王師を勞せず人命と戕り守自然鎮靜ニ
仕テ中恐涉蒙之由回復を奉懇願至誠ニおるハ
果シ若お多シ可哀ハ蒙是只涉蒙之由為を乞ふハ則
天朝ニ由為を乞ふ 天朝と由蒙との由為を乞ふハ
之為竭底ハ即億万ノ生靈ニ大幸ニ由る依之同志一
同連名を以テ此後奉懇願を何卒決蒙由相續ホシ候之

勿論速ニ安軍所解兵ニ相成圖國平穩ニ屬シテ根所蒙
並ニ成下凡概仕テ私共愚忠痛哭ニ接シ多ク敢テ鉄
絨ニ罪以犯シ昧死奉教以上
閏四月廿七日
同志連署百十名

○
常州真壁郡某村の百姓去月下旬安軍ニ役使され其物
白川へ進リ途中會兵邀へ戦ハテ敗走ハシ一長
括二三棹官軍方へ分捕蓋以閑たテ點檢セシ小銃等
外器械數沢山多シ官軍勢馳集リいつモハ好獲物ハ多
ク喜合ハ居たり折シト地雷火相發シ 千五百

人計し人数死傷ありし事一々漸く又百人程引渡せしめ
立退る途中候方より又々會し伏兵起り散りし事計
成右人足も這々近傍り候様怪友人ハ舟三艘へ積載せ
鬼怒川を引渡り由

此後虚实不詳且夕日之戦なり候事知る者一々姑く
後報を待つ

○尾州より出府し去りし

一尾州地へ近國に法尼居屋敷を建る既ニ孫堂屋ハ玄
葛屋しきしつふふに檢地代打りし

一名古屋より四十里程の内福島の関門より尾州家老

山村甚々勝と申者守るべきに此所此心士あり

該府より江戸まで此の関門

江尻宿新関

此所より形きし印紙引替ひ下紙を川崎関門
へさしおす

沼津宿関門 改め計り

米根関門

小田原宿出入とも関門有る改め

川崎宿関門

此所江江戸より系りたる者ハ参謀方より印紙濫請あり

差出—通る

○野物大田系立より来りし人北吐し

- 一 結城侯ハ二本松へ引取老侯ハ何方に系らるるやお
からず孫玄少く城又發り空城四振る由
- 一 下妻侯ハ水戸下町華光院へ立退居らる事
- 一 下館侯因珍家来りて返半玄へ脱走ハ命一居、執
- 一 真玄治元凶代友山内源七而王臣と公召居居を要那
須郡の百姓とも集り安軍又小銃を々々向い、余
殺害はお成小執り付原七所支配不永締ふお立、廣
く、當時官軍より紀中より産ん

一 同四月廿四日服走隊兼會黨とも八百人計なる三斗
小倉通り出張し然官軍長物大垣守初室大田系勢案
内より笑谷村と中不へ繰お一同不、我争お案苦
戦はる少くも五分の勝敗あり、玄勢ハ培原へ引揚双方
怪我人即死、事

一 同月廿五日奥抄白坂宿場し昭神高不會し人数八聯
隊五百八十人余白川より押出、陣を張居、如安軍
因物薩物黒羽土浦し人数千人殺出張白坂之陣、お
そい、お、安塚昭神山し、伏を敷し官軍も、
討とお成討死、負かむ知行中川へ死骸流と出し

兵に死傷多し、且つ大勝利あり、白川へ引揚
兵事

第三十五号より出づ、福島に未状と見合す

一月廿八日、前書に皮軍白川城へ又々押入る、付少
人殺し、諸城より成城下焼拂、返る

第四十号より出づ、五月朔日に戦ひ、白川城
に官軍方より、いふ説と符合せり、いふ説は真
説なり也

內外新報

第三九號



内外新報第三十九號

慶應四年五月十四日

○五月朔日大垣侯の届書

米女正分隊人殺野所芦登陣去る女不日嘯出立白川城
ト是を里籠手おカゴ系と申すまぐ進軍いふ河内山林
又城を出沒散砲より及び以故薩長忍并禁藩の兵同とく
相進之屋九ツ時迄死力を盡し攻撃以多し以を破り死
我ハ寡陣又討死に負ふふと相成以る白坂と申すを退
ぎ皆時休息を以て押寄下りて遠軍儀いふ大田系左陣の
薩長忍并禁藩より諸証付を元儀の事嘯天々の苦戦に

て退く疲乏果し勢乏み故芦野等と退陣せんと相決し
同日八ツ時色日暮へ陣兵力を養ひ死に在り者中未だ
以る此所を放し居申上り
討死に負左に通じ

討死

隊長

高井初右衛門

日人組

川井徳七郎

松井於鬼孫

小倉森代二
林 信右衛門
萩野孫市
川合飛之助
野原芳之助

手負

砲隊

内田健吉

堀井 工

銃隊

清水貞之丞

大徳寺二条

高木貞盛次

古澤為二条

流石守二条

因云去此の戦ひ敗せ日露の士見ふし死体より高杉確水傳
にかみ居多くと記せしとあると甚し其虚説あり

○常例列藩士の沙汰書

先般房総之地城法張抗に付進撃の初忽竄去の所今畏
鎮定より及び巡撫を爲し農事繁忙に秋の令し軍

会引率多ふ來往の及宿支取の煩勞より有之者今
廿日凱旋の統への毎々 朝令の通者爲大義を弁別し
曰民に教海最る爲緊要事

但今故軍需費軌勃起緩急の節を以隨列藩相共ニ救
應際機を以分際然り有之者

後四日

東海道鎮撫長先鋒

副執督印

麻生藩

松平藩

水戸藩

足利藩

安戸藩

○部下雜報

本下二回工何隊あり八十人程ありしが廿日の官軍
 の指揮を交する事と成り大橋手か菅沼の屋敷に屯集せ
 て其隊中より二人の兇徒あり之を捕んとしして國章より及
 ひしに何れも勇士に之を隊中二人を切伏六人より負
 せり其内より一人の討死あり一人は遠某と云者あり刀
 つらひに之を討てを安と切抜しが遂に成る官軍より

捕へられしと討合中より砲發せしものあり二發のち
 是を發の味方と打殺せし又月七日の事ありとぞ

又月八日の秋大風ありと麻布谷丁なる南郡侯屋敷の
 崖^{ガケ}崩れ出し其下より住居せし屋敷屋の敷内のところ^{オシ}に壓
 殺されし者あり之を上方へ集り居るものより老母書紙
 不仕三人ありと實は慈母が死すありと云ふ事あり
 し連るる者あり崖^{ガケ}下の居
 不仕三人ありと實は慈母が死すありと云ふ事あり
 日九月海に度の人殺す山嶽硝薬より火薬八十車ありと
 引出せし

○又月八日彰義隊よりの届書

撒兵勤方

孝化弟

吉田要之助

撒兵

秋元系七郎

正守守居支配

改以系正介伯父

正田友三郎

正小人

伴辰徳八

存子

日

保子

清子

陸軍側近下役肝黄

文若正介甥

関 規矩寺

日

存子若とも此七日夕七ツ時迄皆申之傍所瘞与穢若
 迄通リ掛下り余侍侍之者三人以酒具の上にも
 有之引通リ人々へ悪口礼妨及以振子然と訊七
 解隊附属歩兵とも通掛り余は法又右歩兵走人切倒
 介斗人へ手麻負を色程ねともへ由同様切掛りへ共
 穢便死押下中と存じ穢穢存を以内吉田要之助介四
 人は子麻内負り以付無控存之内走人討果し介走人

逃去の以付海軍掛物に横町迄に日笠を著一商人
の邊に故商人との討當に僕引取に中ノ陣に依る世
限に届く上り已上

○

去る之日「ヒュルキユ」と云外車蒸氣船日の丸の旗を揚げ
一入津せり案組の皆英人なり世に船延びる
英國人より買上られしより一連の六第五の「トル」と

○

山形戦卒の洋報を好く次号より出ん

大系野建白書原路侯款款書等追記記載をべし

內外新報

第 四十 號

定價八分



内外新報第四十號

慶應四年五月十五日

○姫路老侯歎願書

後て其哀訴以今般之人□□恭順後世二念の所を
敵國且程先以来治世之遺教を以て思ふ家名相續は
仍付傳又程有 敵意之程其感佩以同氏忠懐後之家傳
翠之乃仍屈不中以上之途又徳川累代 朝廷恭順之志
も其微不仕の身又其軍中實に悲歎懼懼之至り其
以依之者其後世に在り 亦其罰以忌諱之能を以て
以て其悲入の如く由廣く其路を以て其家名相續中上之

私家節之元來徳川家臣僕にして之家謀家
より降てある爵秩を辱し以て付 天恩之莫大
るあり給へ給へ不承忘れ給へ徳川家衰運之今日に
至累世之恩義を顧み給へ之家に是列比府以様
以君父之懷蔵するの節に相違して侍従責をも
て謀家仮令寛宥を 辱をとりつて侍答の免
れ以とも又臣あり上にてい誠又難忍事
に臣に殊に封縣の侍制度には危い上
の各藩陪臣に由り是れ通に有る謀存に付
私ども家節に徳川家の侍従仕侍國恩を
謀報度志願に以能い又此地に忠悃 天
禮を謀家且此侍改

華に抄扱に付仕 石上以候に由然し
侍多に候に致遠憾 皇
無侍危い候に何におれ中上以下畏
志に格別し 皇
愍をとりつて是を承り士民とも
飢渴を先達に候に有 皇
仕合に甘んじ候 王政新一
新世界に侍臣海の時ハ齊^{アタ}又
候に由君臣に分義を忘却し
私利を營むに候に候 天怒を
候に則天怒を謀欺に候に上
の天候を謀し下候に賊
臣に觀覲を生して中裁深く
痛ん憂を候に候 天怒を
犯し候に死を顧み給へ只
爰に謀欺に候に候

五月

酒井

○同藩届書

有罪の此と願ふは思言上仕の折今殺の事大要に立
到て以後も畢竟私ども不承に在り申の事にて行は
上極も無事深く思入るを以て抱てい 於廷所裁許
不もて有るに由共從後之所家之所者罰を其給に私家
弟之其に付文困亭より別處に通也 於廷一哀許仕
間是之津園並に下度等あり城地之其の所家へ返上
可仕若に此處に於とも既之告殺上之を以て通て軍城に
仍月今に介備之者本城お固在り以て其の付を授け
之執歎死仕の同世に上り以上

五月

酒井雅樂

○

五月朔日午の刻白門と白坂との間にて戦事お始り
軍の仙臺金津福崎二本松柳倉官軍の薩長長秋長春
双方多人殺りて大合戦也軍大勝行末の中刻仙臺勢
始介支て人殺後上は相成金津勢の勝に乘し退き
入りていす核合より官軍打出し以故大に敗れ
し申の下刻勢引上りて双方討死二百人ほど怪
我人の殺不知と申すに由り

○無題

失名氏

錦旗遥指北陸間道路險危時又艱想像三軍歸思切落

花残日勿來関

同日月廿七日を過ぎるに、武蔵松代、武蔵加茂、
又武蔵長凡、日下人、伴、日下、桑山、峠、出張、以て、率、戦、以
お成、是、高、田、高、原、を、人、討、死、介、の、不、洋、加、勢、も、高、原、を、人
討、死、士、分、日、十、人、討、死、勢、三、百、人、脱、討、死、手、負、の、準、を
以、在、に、高、原、を、交、戦、に、付、余、は、脱、走、方、強、き、多、と、此、間、有
し、い
廿八日ハ高原を脱走す不中、以、以、以、以、又、三、日、高、原、を、以、
敗、走、り、五、高、原、長、の、兵、の、間、を、入、進、入、以、を、信、也

勢、と、脱、走、方、と、見、透、ひ、薩、長、隊、中、へ、大、砲、打、ち、と、高、原、
人、救、脱、難、換、し、以、中、史、以、付、抄、分、き、又、お、成、也、脱、の、出、雲
崎、へ、引、上、け、官、軍、方、ハ、柿、崎、推、谷、邊、へ、引、上、け、以、以、
後、如、何、又、お、成、也、以、其、時、秋、苑、脚、の、者、到、着、の、信、し、以、
有、い

或人曰脱走軍の出雲崎へ引上るハ即チ官軍の
柿崎推谷邊へ引上るとハ疑ふが柿崎と推谷と
ハ其地は廿里ほど隔多し柿崎ハ桑山の近方とい
ハ其も推谷ハ志保峠を越らくと書字の泚り或人
又傳聞の誤り姑く存して後信を待つ

○補遺

一四月廿四日、廿一日岩井以て戦事有る、右岩井の地、おの
 沼田以て勝の辺まで水より進み、かき只一筋の路に
 るのこ薩まの石沼田をかき、進むより、長が太
 垣引つゞき、をだし、終に勝軍のよ
 一廿六日、岩井戦事、官軍長太垣、も初五ツ、時々
 押よせ、い、支、使、より、も、費、袍、より、及び十二時、お、後、ま、ぐ、い
 路、後、敗、走、飛、り、と、深、引、の、姿、の、ま、こ、薩、英、土、お、等、の、援
 兵、之、百、人、餘、来、り、ま、し、て、遂、に、勝、利、を、せ、一、且、こ、ま、い、弾
 薬、お、打、ぎ、ま、し、た、成、か、を、解、任、致、し、よ、い、に、お、座、い

○
 四月十八日、廿一日、廿二日、廿三日、官軍勝利、廿四日
 の、殊、に、お、敗、軍、以、て、三十九號、又、出、せ、大、垣、藩、の、居、書
 以、て、ま、る、く、そ、乃、致、程、多、く、死、亡、有、り、い、の、事

○高田侯届書

式部大輔、以て、戦後、國、事、治、定、と、申、交、へ、以、て、境、に、付、為、警
 備、差、し、人、殺、し、出、さ、固、不、へ、加、お、極、薩、お、極、長、お、極、人、殺
 し、も、愈、々、滅、下、し、存、在、い、内、より、お、配、一、日、固、居、い、先、方、人
 殺、脱、走、人、の、内、に、お、座、い、お、戦、事、以、り、及び、中、裁、の、押、極
 以、お、座、い、お、加、お、極、人、殺、初、め、降、く、及、後、刺、し、こ、成、る、く

大詰極く候と雖も骨折存在に事同日午後六時
何處にお放しに我混雜して秘計にへども大砲打始り
以て付双方を接戦にありびに打ち取らるる討死仕
以る者退きて了り哉以てども先ん九段世原沙届り上り
以上

五月三日

神原式部太補家来

岡島但馬

○
後四月上旬羽州戦争の事實地圖を加へる第四十一
節に詳説を明日開刊

內外新報

第四十一號

定價八分



慶應四年五月十九日

○督府 御沙汰書伊豆守殿取波

過日以來族个才々公得遠々々々
 意不違お戴主人□□恭候々々々々
 以々後走々及以之野山内不々々々
 一民財を掠奪し益先暴を逞々々々
 一殺々国滅故々不々々今被誅伐也
 為心得可未違也 大総督宮 御沙汰書

五月

○五月十五日之晝山内焼失之場不

山王御供所

山王社清水堂大仏殿穴稻荷等残り

吉祥閣

俗山門といふ

瑠璃殿

俗中堂といふ

御水屋ハ残る且

神祖御灵屋ハ別条也

御本坊

御門并ニ山築地ハ残る御殿向不残焼失

凌雲院残らず

涼泉院七分

光王院残らず

妙教院五分

光成院五分

根岸片隠殿

御門長屋残る片殿向不残焼失

此外ニ未多分

同不近辺町家焼失五分

仲町多例同片側町廿二餘を以て焼失之場也

廣小浜西側坊々々々同東側五分

教養寺町残らず

同朋町同町

上野町武丁目同町同町丁目少く

山下道がんあぐ里村五条天神焼る

侍後士町がく

下谷町同形 沙草新古町同形

坂本寺丁目式丁目残らす三丁目少く

谷中门外町屋跡らす三階所より園子坂下死に焼く

天五古本堂并子中門前所根津も少く焼く

山内并子近邊に有之に死骸片山内四十八九人三橋内

四人廣小路三人其外谷中口死にともち命七拾余人

焼死し老数不知

十五日初五ツ時あふ戦争お始七ツ時迄終る共火ハ熾

に夜半以迄残り火盛十六日昼迄と有し

昨十四日之野屯集し老々も退付するに命 大惣督

府より各藩隊長中へ下りし一四日夕刻より元付橋

より切り下谷辺ハツふよからハ十筋邊市門外廻市中

に果く立退り中を以獨居しとて徳町に老を援け幼

習し乃後よ退きしひも老の陸續しとておひ多しと

其外泣く具を運中一強動ひとてあす十日早朝

より友軍市人数繰りし谷中廣小路あり及口も碓茅町

榊原炭屋並大砲をかほえ打おせしとて同敷新れ

川原丸多くハ不思の湖水に落款方すし少くかす中

以て打也外及口へお廻り川内上野方ハ市橋し傍

兵よ車坂町へ疊し胸壁を築き黒門前へ土俵を築き防
 戦をかよひ山王山より大砲をおせし越下台立花屋
 変之官軍潜伏し西町より戦ひ同不少く焼く之故橋通
 より一戦をくちおん屋敷町少く焼く其内不火の
 子熾ん小官軍亦天通穴いふり廻り横合より切込
 せし由より山王山烈し苦戦谷中口も友軍切入り外
 して上野方遂に熱崩となり友軍大勝利大小砲銃を捕
 多分くしし 黒門主様何れかか出立退く為成りし
 風吹其外宿坊方不仁僧も何方へ立退し外おれし
 夕刻友軍法隊引え成り本口通木退く凱陣せり

○市中 所獨書四通

今般徳川□□恭明し実効表よりより祖宗之功勞
 思食家名お績は 仰出城地祿甚あり候退し
 御沙汰にお成末くく去り至近冬其不候得さる者
 候と 推方との 思食より為立り処堂園よりんや
 旗下奉り公召遠く孝玉厚し 所報意成拜戴し奉ら
 ざるのみ多し主人□□し素志は度り謹慎中より
 を以て恐る脱走をかよひ不火系友軍にお抗し無
 辜に民財を掠奪し兇暴い多らざる不あり弟民塗炭
 し苦み陥らんし候故に今般不召心事誅伐せしむる

其害消除天下を蒙ふ安ふは至位也民と
し早く安堵し思ひ成る事久く多めおれハ根
離散する事何々危かしく篤く所執意成体認奉り
未くは去といふ事多し聊か遠き旅此を安堵い
ふ各生業を営み其外安んじ安んじ者也

五月

昭十五日より三日の旨詔西海濱お敷く一切是止
事

五月十四日

大総督府系係

昭十五日より三日の旨詔宿禰人夫等立て後一切是止
事

五月十四日

大総督府系係

過日以來脱走の事止む内々外下は屯集屢官兵を
時殺し或は安軍と偽り民財掠奪し益兇暴成還
るは奈実の国家に乱賊多し己来右格と者を見付次
身速く打取らるる若第一密に扶助いふ事或は隠
る者多しはむあはハ賊徒因罷るる事也

五月

○

聖十六日朝王子迎々々我事何りし由

官軍由人教江戸市中并々近在亦々見まかり残兵散し

し槍義由旨捕上お成る者も々々々々

同夜赤坂邊火何りし

大総督府し印鑑又々田安一橋殿の印鑑亦持々々者ハ

出門々通り不お叶ハ

內外新報

第里三號

定價八分

内外新報第四十二號

慶應四年五月十九日

○ 越後新發田老侯は月中國許へ集られしに越後六日
市は新園を建倉藩の書士押留めあり日洋を所とし
其侯の儀に侯を咎めしといわくは月勢の中は官軍
交り居るに於ては愈々其の由は此園に於て改め
よりお人殺しを新發田を送りしに其侯に侯集られ
此節中倉藩入に長浪憲勢を代りて其の園門を敷
しく改め百人隊の供人は一板づき懸れを返せり此際

札と以て金津城下を通り新費田原場赤谷に圍ふ
て鑑札を戻し新費田へ着せしむ不又塚橋と之橋の
上より

但新費田原の素より金津との廢齒の交りあり
舊の一切通行せざるよ

○同日月廿七日出概念よりの末帳

去る女の日薩長大垣の兵白門表へ懸ひ来り街を第
不山ありび又黒門口に以て戦事こまなり掛曉よりお始
め不の対は之の戦會を勝利く中心に炮声為地へまこ
へと定りしに兵隊繰出し又相成り金津勢もこの陣せ

ざる中に村大砲二門人殺百五拾人なりと以て白門へ出
張り孰に西有にその外に城にケおく守をま出し十
はる又官軍近境に屯集し會をより襲来し以て子の様
お見え概念とよと奥あり安路に防禦するに記
の中に西有に

○奥妙某藩士の吐し

一醍醐殿が宮造りを襲来を我服に改めしれに十人
の兵隊以て西有にの交退り落失せ後口入人にて
福崎城へ西有退りお成しよ一或る説は福崎関門に
て佐人の不詳討まひかの噂あり

長藩 世良備藏

同附

勝又善左衛門

右の人福島市中に討死すお成ひとの事

同 松本 某少年

世良又附ありて討死す

同 野村十郎

福清入口林に討死す

同 同家末某

福清長樂より逃るに松内にて討死す

同 中村小次郎

淡川と新町との間に戦死す

同 大山格之助

同月廿八日以多分討死す

参謀附 仙藩 栗原五郎

白川表より野村同様に討死す

一 仙臺勢亦八百人後同月廿七日迄白川に縋る

一 之に小隊福清へ出し討死す

一 仙臺中合戦當時に榎板大に變し薩長の徒に討死す

一 此の日の風聞あり

一 世良南於津佐の西に討死す

来りて意執難毎年發せしをらんか

一 奥羽の列藩十合せ令津附罷りて其に付三春弘おの儀
論玉苗のりし多ふて此論よゆし了り然もとも其儀
論を以て介談さる事以付相分らん

一 安成勢又月五日白之橋人後白川口へ出張の事

一 相馬勢先甚く郡山まぐり百人後傑出しの事

一 館林秋元侯の陣を羽勢天竜以有るに交付方とを鎮
撫相成の陣を引掛ひ上下十七人隊引連き諸侯具
為通し人足はく白川へ通り或事申継之方是交へ以
以付磐城平へかけ五月朔日湯本岩へ泊り

○白石會儀列藩誓書

此度仙臺白石におおくり列藩會儀公平正大を以て
朝廷と違背し生害誠極恤し 皇國を維持せんと欲す
仍て誓約する左のごとし

一 強を恃^ツ弱を侮^ラすべし此の危急を傍觀する者有る

一 一におおくりの列藩悉く^{コソ} 讒責を加ふる事

一 取を操へ利を為し機密を洩^テし同盟を離間する者
有るはにおおくりの讒責を加ふる事

一 妄りに人馬を勞し細民の艱苦を顧みざる者有るは
於ては加^ニ 讒責す

右事件ハ列藩抗議を盡し公平に決すべく軍事の機
會細微に節用又至り少くハ庶儀に及たば大國の号
令に随ふ事

一 他軍を殺戮し令殺を掠奪するの類想と名分を侵す
者有るとおわすを速に裁判に付す事

但列藩歎息曰く新聞亦曰輯 毎々 中外新聞亦
二十三年より久かり故に累して載せし但延と駈
付事會議に加之を以諸藩重臣の姓名の之を記し
て其遺漏を補ふ

羽州新庄

戸沢中勢大柳家来

奥州磐城平

安房理之市家来

日向泉

本多新登与家来

羽州中庄

石井武左衛門
六郷兵庫家来

奥州福島

六郷大守
板倉半助与家来

羽州磐田

比田権左衛門
岩城左京右史家来

興州湯長石

太平序錄

內蒙長壽丸家來

芥系 策

同州下平溪

五花出雲方家來

五花介記

同州采沃新回

上款發河古家來

江口復新

內外新報

第肆三號



内外新報第四十三號

慶應四年五月二十一日

○五月九日修夏古殿西渡し

服部筑紫守海陸軍附病院之清用紙扱以乃ん於の爲り
お達し以事

○同十六日西日人清渡し

別紙を通す

大熱督府上之註 終出以以付吏、お達し以へども
於ん於の爲り清旗本西家人中へ以註お達し以事

五月

徳川亀之助

之方旗本撤兵隊別組其外屯集之者先之當分之万部
兵家瑞正社

信村以茶屋院之申進以事

○月十八日之奉仰大目付沙汰事其以并又沙汰

付へ得夏方殿内候し

府内制札子之九除以板

大總督官 沙汰信村以事

五月

右之通り候 信出以百早之九除以申之致さるる事

以事

○

上様沙汰名

家達様と尊稱以名沙汰旗本内家人中へ下進其以事

○

去る十月八日上野山内彰義隊其外屯集之者ども

官兵沙汰向お成以之令く

前上様沙汰意又者宵き性之粗暴之不行又おし以者

以之れ以り以以付沙汰退討有之以候以之沙家又沙汰会

有之以節又之候以執以付其遠篤とおん於從來御様

玄格におきて私に屯集しつゝ務立に振て着決しと致
走らぬ者遠有るものいゝ意なす付以て身も了れ有る處
くひ

右に執事旗本御家人中淺きざる振てお福に

○月十九日御家人の返し

浴姫若振御事加御表にあらして御不芳之處御養生ふ
為叶去る三日御逝去を振て此後御旗本御家人中へ
御進出多

○月廿日

林 大學院

あふに戸法甚に是を以て

大總督官に 御出以て付御及 御免に成り

○

酒井安房守

佐久間鏞五郎

石川河内守

門文言勤仕並に余即日石川佐久間の大目付とよ余
酒井の學問不御用に扱と余多

○薩州より御届の字

共士

湯地活太弟

有吉庄之丞

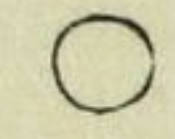
有馬早八郎

右の付依の者どもは、は度い交時七月夕時分根岩
邊にあわて彰義隊のりの八九人より奪ひい奪右二
人と死せき是れ也而へ連是越を中聞いれども
新とい交意極切實時お我いよりを人の場よ
て切伏られ敵あ人打さくく一人又子を負せし由
又由存いれども程退く多人殺馳集りい付を接あ
人の切ぬけ物込不枯木所觀音堂あまぐりいれより

に涉るいれども皆深子を負い上陸と退きりい付
不消心奪人を切腹しき人の者も割腹被せぬ
の交子鉄炮をめぐり打伏られい探索方と者届中
出いれ付退き確證をぬ委細マヤよいれども不れ敢
中上い以上

五月八日

薩摩藩



同日月廿二日横濱製鉄所を徳島家へ引りて
この掛り及人の江戸へ引れ跡横濱定及中雇いよお成
りい

名前左の通り

九帝掛

志村左一

附及

鶴 右十

山本半

入費掛

志村左一

山口誠一

中村民五

恒川成助

分配掛

川久保忠兵衛

清水孫十

近藤豊右

永山富右

倉庫掛

福岡喜四

横井孝之助

大崎左吉

山崎弥一初

○

上野山内はく官軍方の兵士十二三人を生捕せしよし
しに付松平右衛門左衛門のたむけ裁ききい交文に承
伏せ居却るる激の返書よあまびい由

內外新報

第 四 號



每份八分

内外新報第四十四號

慶應四年五月二十二日

○
 水府の武田金次郎 先年中高名をせし武田 〆先次系
耕雲齋の孫あるよし
 脚上を海府致され小石川の邸中又在としが女二
 日巳の刻に各戸表へ海國のよしにて出立の形程い
 とりぐらしとて見あるものゝ倍をしをせまきとある
 以

第一書 丸の内ふ水の字白地へ長く書たる四半
 の概をな

第二番 砲 不動如山、 硝地へ上の五文字を

く書たる旗を旒

大砲 三门 車甚はて

第三番 銃 動如雷響、 硝地をちるがれ

小筒 二行

第四番 不持まどよ花菱の紋付ある旗を旒但し

も級と朱

第五番 金の花菱の馬印を

武田氏の馬上はく白毛のトマし立烏帽

ふを忘し小具足程と紙の陣羽織はくザイ麾

を腰にさしあり

同舎弟 馬上同防

第六番 鎗 其疾如風、 硝地旗をちるがれ

檢隊 女人徒

騎馬 走人

第七番 監 其徐如林、 硝地旗をちるがれ

第八番 輜 侵掠如火、 硝地旗をちるがれ

右隊中士分八十人許勢百五十人あり

全隊の士白練へ赤地袴襦の襟袖口を付ある陣服を

不用は隊長の立烏帽子を忘し足鞆ひをちるがれ花菱

あり

才三十三号はあつるせし本假刃はこしらへる直
繁松の持の世襲よりの子文あつるを五千人あつ五
百人の誤あつらん欵

○

十四日上野戦争の節官軍方伊勢の藩曾取春朝未
る人の計ひはこ山下料理業をかんたんの二階より
まづれごうに山内の敵をゆるひ打はせしはよ
竹並の隊もや下るの矢末を破り切入世子を破りし
と或る藩士の儀くせし

同じ戦ひは美門内は屈竟の勇士とお見へ七人ほど
討て出大勢を切るびけ討たけは節悪くあはして三
人討死四人は門内へ引れはし

園勢先登は進み廣小路へ向ひ戦ひは交薩勢と
入きかきと天神甚の方へ出る薩勢はて美門口を
攻破りはし

長州勢は谷中の方へ向ひは交地勢はく敵方より
の木蔭よりゆるひ打りし世をきど苦戦のよし

薩勢富山候をより傑出し武百人ほど根津の方
へ進みは交は美門内は彰義隊の士武三十人程

園り居直に接戦に成りて志づゝて推し合ひを人強
勇の者とお見へ踏ととゞまを奮戦しゝゝ以内彰義
隊の者ことゞく谷中の方へ引りけ右の士を人ほく
官兵式に格人よ手を負たせし場を去らば討死致し
しよ

日不戦争中卧竜隊の兵士殊に激戦しゝゝしよ

○
上野戦争の跡兵音羽後持院へ落りし風岡有々外に
て官軍慈本侯佐賀侯を介し四藩に軍勢去る十六
日午後日院を圍み穿鑿有々しよ潛居しめのもを

しとを
とおるへ夕刻解兵に成り半の歩つを通り引上げ

甲州路の方へ大勢落りし風岡有々外に十八日藝
勢四ヶ谷新宿へ出張有々しよ定て退きし向ひ
しとをんと風の風岡有々

○
小石川小籠首町々々通り若荷谷徳雲寺といふ禅院
へ去る十五日の夜歩兵百人ほど落来り同ちほく戎
服ぬぎきて仕度しゝゝ小籠首のゝゝ無何きへゝを
去りて尚十八日因形侯の勢しよ大砲二門を介統

隊にて九かこ住持へ談判と交奉の体少しも隙さ
流徳川家恩義のため少しの内休息致させし
お首元も取り盡し小銃四十八挺をせりしゆへに
持ハ西石連をよお成し
其節亦化僧を人所と見捨がごとかりし附添ありし
よし其後門あきりゆ一日官軍方へ款款としてあな
るどお出しよし其後いかお成し
此時多戸の武田勢援兵として出張し

廿日幕後官軍の法善野あきへ出張とお見へ返る

位岩通りの

○

十六七日の夜上野津山内へ入寇民どもおと宛茶
の跡を抽出しゆ退く少ゆ大勢押し入法及具
等を運び出しゆへに門とメをお附不へ抽出し
ゆゆの内洞ぐよお成し

廿一二日以法方行く佛書類又のちまゝ家具等
有るを隠る者大に迷惑しゆゆ右に全く抽出
し小族津洞ぐよお成しゆゆのちあるべし

○五月廿日伊豆守致書後し

勝 安房守

織田 和泉守

山岡 鉄太郎

岩田 織部正

大幹事役也 仍付之付由政事向は關係い多し

以用向を起るを扱を旨とし得る意以充る公はお達

可然向くは寡く及嗜並を扱て致し事

五月

內外新報

第 四 五 號

海軍會社執事

定價八分

内外新報第四十五號

慶應四年五月二十三日

○同日八月八日出山形トヤこの来状

廿二號ト出せる山形来状ト参考せむ

去る之月庄内勢仁ニツタ回系トテ津基トナリ屯在ハ云々天

童勢溝延ミナト作サニ号ニ溝延ニハ勢増シラツカをト出陣ト成最上門を

隔砲費ハ及ビ去々ト打合ハ云々庄内執行方トテ

川を越ル勢窪サニの目サニ作サニ号ニ窪ガ内トナリトナリト相初ル

勢増を海延多ト放火トテ翌四日己の刻天童ハ礼

入市中ハ火を放ち以テ付織田勢海延ト引返し大ニ

防まひへども酒井の多人殺し打ちまされ織田勢叶
 り散乱しりし由城内にも家中の面く我先に城
 に火をかけ落し故諸方一箇火煙とお成り軍師吉
 田大八廿二号大炊を人天童の棒がふ九のふへ踏こ
 止まて防戦ひるしへども多勢力を引交ひしゆへ是又
 叶りしり東山の方へ落しき逃ふが三日夜引返し
 血戦よりびいし尤も敵の首を口ににくりへ一ツ
 の毛のふり引きげ血刀を擧へ落しこと近以英雄と
 中唱ひ天童侯の関山越へく仙臺へ落られし相
 山形と申も百人許山形より西北長傍達摩と口へお固

め居い交是へも酒井勢押しせ此戦より劔闘とお成り
 双方互負討死をくれりし山形勢の死傷左の如し

戦死

- 大久保 屯
- 赤星守人モリト
- 相崎村四郎
- 前田勇次郎
- 前田庄助
- 加茂政秀
- 梶田半平

深子

岩永郷左兵衛

申子越え進

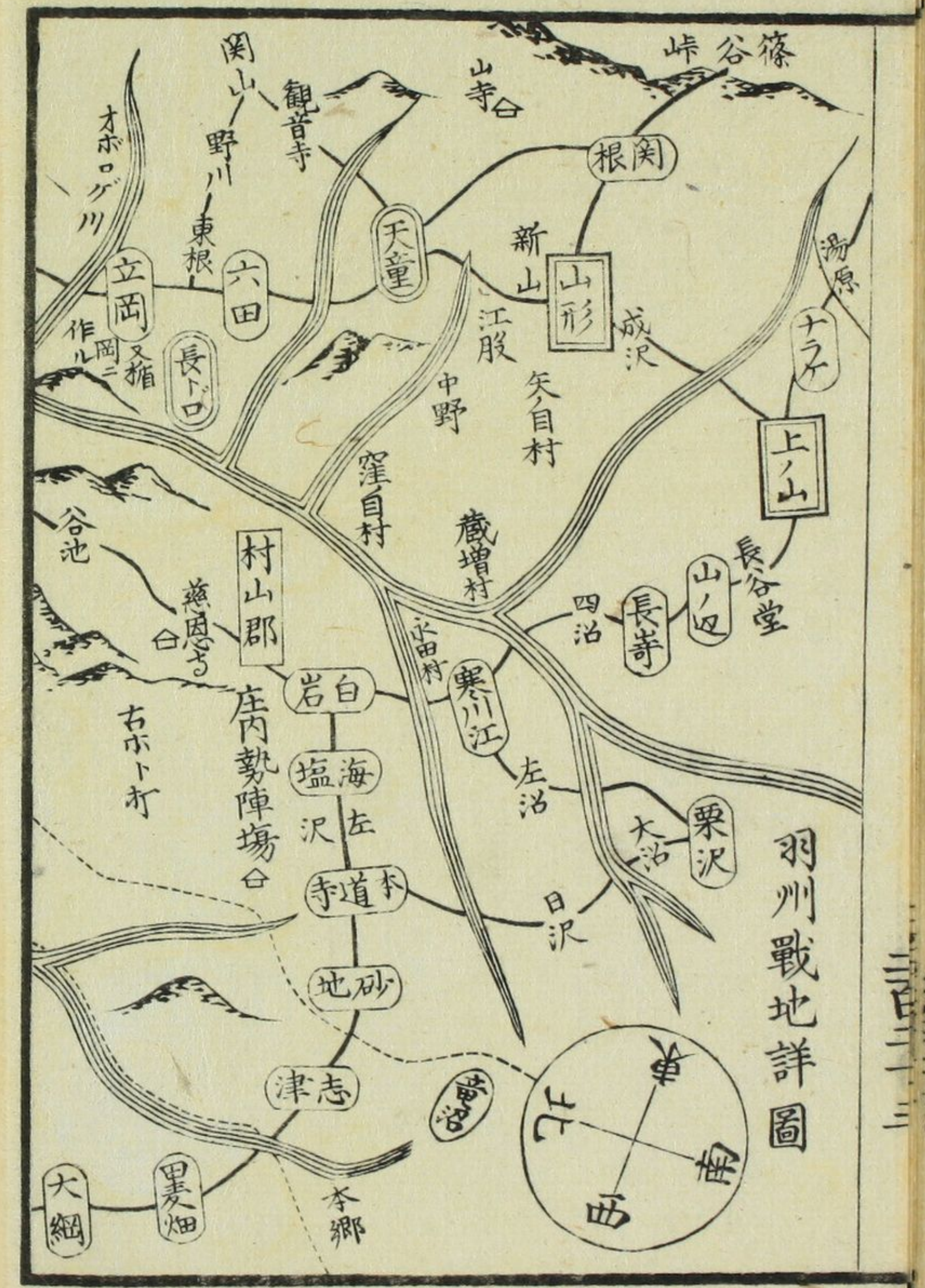
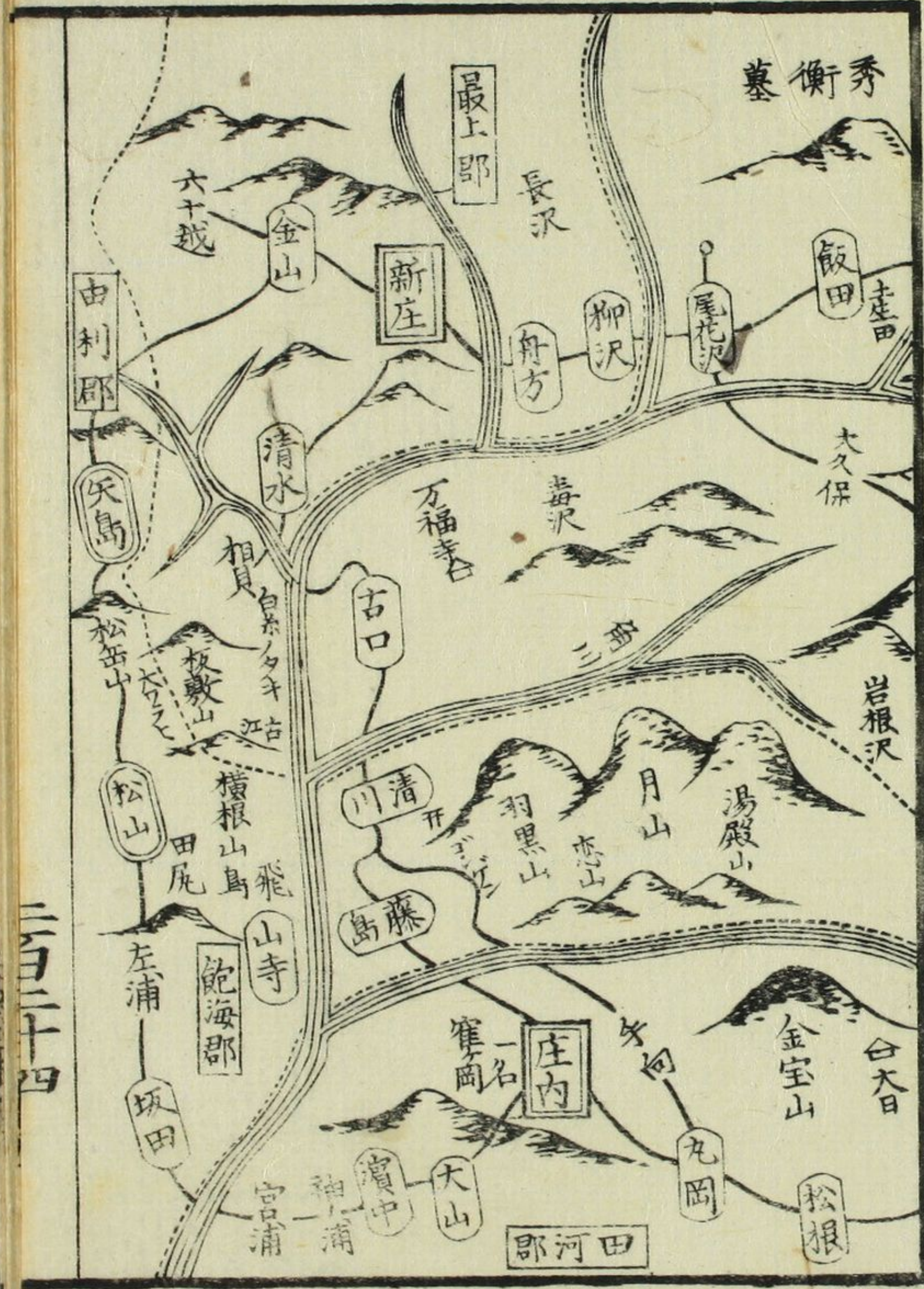
子貞

津久井源右衛門

秘垣道右衛門

右行まゝ余程々働き有之山形侯の威人致されし由
乍去庄内方中々強勢以て高き程くお見へし其内
左藩小文治の目にかし子の者三百人隊引去りかへ庄内
へ加勢い多し由日夕方より山形へも押寄りし哉

以て市中近をとり跡らば家財法道具片付老人女子
は在りて立退大混雜に在りて三位殿の新庄城まで
伊出陣より成り上り山形より小人救合六百人行
附随ひ新庄城におりし陣屋へ放火し其内へ屯在
し其内天童の元合に付引返し楯固ま土生田と云
ふ以て庄内勢と出合六月年々刻より大戦より成りよ
し未だ勝敗はお分り不中且五日筑前入敷九十六人仙
基岩沼より立越六日以後又同藩五十人洋湯の原へ着
一子又成り山形市中敷毛に居りて口々とお固め居り
お庄内勢西在遠おとて敷毛立りて付日夜光助方を出



三百二十四

三百二十三

羽州戦地詳圖

さし出立下案所新門さへ二夜始り今日の寒門にへ
お越山形三日所月々々令兵隊料後吉井より八日町
同所かし為吉ふふど由双方七拾人深引連き山形へ加
勢として兵出何處も捨と引提突といかめしき事以
座以市中ハ助家とお成り土務因ぬり以多し以少へ承
酒味唱等賣人等々只々騷動在り今日も長溝へ放火
し々々其外年の刻以より多勢近在矢の目と中玉大守
焼失とお成りよし

○月十一日同下上りの来状

八日役官軍決之位殿新庄より深引戻し指界より三里

下尾谷以て戦争官軍勝利庄内勢を川向を退治官軍
つゝあつ門を渡り白岩廿二号白石と出張庄内方の
ぬけ乃六十越と下玉の入口を立切る勢ハ薩長山形
上の山形合八百人勝とすはるはる十分とお固め居り由
山形よりハ籠城の人數百に拾人許り先子以て天童へ
已り以て天童より又ハ吉田大ハ先鋒として手勢百人
深引率十日已の刻以より永田村へ出張左ハ小文治
先く者日以悪徳共より我此者の家へ放火し三人を捕
りてより以て畑と中不へ去哉農兵組の大物口兵其隊推
内と中者を生捕白岩の陣不へお渡し中ハ右ハ先日庄

内勢へ子傳ひ天童へ放火しつゝいりあつていせの
 左澤小文治を始め農兵ども三百人も石捕りし且荒れ
 勢左へま越沼井勢を挟打りて終用をいせ既二十
 一日白岩へ寒川にまて騎出し大合戦とお成り己の刻
 以上を未の刻まど砲戦引つゞき接戦双方子負討死者
 有る庄内勢叶は引退きいせいせ及如何お成り哉官
 軍方は是れをいせ庄内勢を逐散し小文治を生捕りて子
 配の勢にいせをいせ余の退きつゝ上り

內外新報

第四六號



價銀

内外新報第四十六號

慶應四年五月二十五日

○甲府より來信抄出

去る八日水野出羽守より來信以

一當城徳川官を御高致し居り専先達と御

王^二至^一執^二儀^一書^二出^一せ^二は^一不^二相^一替^二替^一御^二致^一し^二以^一於^二神^一妙

と^二至^一以^二以^一然^二る^一事^二今^一取^二田^一安^二應^一と^二即^一へ^二徳^一川^二家^一お^二後^一社

仍^二封^一封^二禄^一也^二近^一く^二ア^一社^二定^一裁^二以^一付^二て^一ハ^二臣^一子^二と^一至^二情^一有^二之^一

徳^二川^一家^二へ^一頂^二降^一波^二度^一り^二の^一也^二ア^一有^二之^一ま^二ま^一と^二ハ^一世^二経^一而^二信^一

望^二之^一有^二之^一以^二族^一也^二何^一も^二爲^一く^二在^一ハ^二平^一生^二と^一兄^二と^一若^二と^一定^二未^一

と存小衆初々忌障来る十日中右出たらず其後復ゆ不
望し其を眷族等互連き支度個以て武有るは所無
道と成下又ハ是をこのごとく

之室は多致度事ハ如所極とも涉後利不_レ在_レ一祝
同仁

思食し奉戴し生海に活計速く安定し去就不_レ出
副総督府

東海道鎮撫

副総督府

番謀印

右為武親出向十日程の支度にて水登出羽也
附送記とぬ武のし

○八月廿八日喜梅在より来てし農丈の吐し

武親^コ高^マ燕^{ハシ}那^ノ級^ク尾^ビ在^ニ結^ケ仁^ニち^シつ^クる^もあり^山中^にて

至^ル要^害ノ地^不あり^志あり^よ世^に東^敵山^の跡^を

のよし多人救はてし近頃の農民退くをせ加たり

多^ク意^を糧^をお^はた^しく^お集^め防^然の^用を^おと^すの^久

然る亦へ官軍方討手は向馬海門より^{アオキマチ}扇所各道へ

宥陣し交する廿二日夜浪士勢不^レ衰^に押出し本砲殺

十挺^にか^小銃^はく^打き^小故^儀く^りは^く官^軍方^の引

弘く執に西存は生及の戦軍のうらお成りや女官の
と夜より女官日よあひく新室へ熱勢引とやま未成
でいより一但し版紙のふと放火のうしとぞ

秋又色の風習はく年々益以の大成をとりて村
こよりを大なる成きまへて大なるまありての
本筒の丸と一このうへ長さ六七尺もあつてし竹た
がとまいた筒をくかけたり世戦ひは用ひしは多
世尚ちうとえへて又世色の持人多く位居る世者
ども隊中へ加えり大なるまきしとぞ從て後の
事実とらば退くまはるべし

相州小田原辺の 事次号と出はる

女曰日前後東敵山とあつて官軍方より下谷湯へ
本谷中約と浅草根家辺を介してへ十八日戦争に
て秘殺せしめりて施承なり

何々るまきしものとお見へ東の木強はくまをへ一回
は方おどの箱やうのめのと津守發死体の人とあ人
殺はく早^{カキ}旗本高殺十人ほど津守發をまされあ廿六

日船五つ半時辰小石川傳通院前を涉通りありし如
何あるものやおもしろくは風聞のいふふ 東照宮極
の清き像おとんかといつてお見の法人もろろ又涙
さしぐらゝり

○

去る十六日船流お疾西登園体茶山門指法に在りそ
級をまわす又たまきまきし有とよし

上野山内院院

山田平次家

白金 七 席

二十二 二 七 位
四十八 九 七 位

○志あき羽の藩士あるか一の妻園伴へ出立の
折その婦又つらさを却ておくましし
あるとてある人のさしこせしき
ぬ

春あつとまぐあるまき草とをそふと世の中と思ひ
くもれ生者必滅命共空難の長ある人るを和
め有秋よりくるまぐ凡性あるもの世理をせぬたも
程がくくやき程はは海浪あつたき津代のそのれめ
美玉治徳川上又二ヶ島の松の生ひ初まみとをく
ふそ吹上りたまの位そあるとまどお上りの辛苦懐ちく

積る深きを志めきつて芽出な老木と成りとけて年
く枝葉葉へ仍りて百年うとたぬきしゆむよつて
や月よ雲なきる秋風よ今も命根きく枯るんやう
さぬの歎くはも花のまうあり傍にもつふごころた
のむ木の下のありてを誰うの純のかちくらん庭のふ
後もろちしめりかよしたのちもちりぐよやくえん知
らぬ大和路やぬて来蘇路キッヂのちもるく才のおちり
きん定ぬるき世のまへに誰をかも志る人よせんる
砂の松もふ葉よ限るといこきあん生者必滅命志定
離の代ぢもく是地もくときと終いの元量の憂きもく

美如の月の明るるを迷くを夜しを地獄の責ア、情
きこうしくもさぬいまたよんど人なきまよひぞ

かまの世のうりのまゝ終いつくともほのせむ
のま身はくちうせむ

○

神田次田丁へある大所の大幅一軒打まき有るは届よ
お成ひ先町内はく大切よつて一巻ひ着流沙流の
おのむき右へ糸備の人あふ有るよつてこきも上野
銭本は月よより持出しゆめのあつんと所方のめめ
吐しきり徹よ世の礼を多る涙とふめゆへぬこの

多
か
う

三十一

內外新報

第 四 七 號



定價八分

内外新報第四十七號

慶應四年五月二十五日

○横濱へラルド五朔日サニ新開抄沃

尚港に投錨する船の熱計二十を續るり世船名及び出帆せる地名とろろし着帆せる時日と先し揭示は

チフトリ船

蘭ロンドン屯より四月六日入港は

イナガワ船

サンハイより四月五日入港は

ケブリートレ船

フランシスコより三月十五日日

アター船

ホニコニより四月九日日

ボリハル船

ソラジャ子ロより四月十日日

パンテウト船	兵庫より同月十八日
オレーヌ船	同より同月廿日
モ子一タ船	■ミアムより同月三日
ベ子ハクトリー船	ホニコンより同月六日
ソツピアヘレナー船	ボルテウスより同月九日
ブラニチ船	カルジヒーより同月十三日
ヘルマン船	イニラニトニーより同月十六日
イタリー船	カルジヒーより同月十七日
パルメニオ船	ロンドンより同月十九日
シヨニフラー船	同より同月廿六日

ス、スヘルセー船	ニウヨロクより右日
ケワ子一船	同より同月廿七日
アルビオニ船	オーストラライより右日
アレキサニテル船	ニウカストレより同月廿八日
エンクララー船	カルジヒーより右日
ハルレーホルジ船	バルチモールより五月廿日
オニクルドヘー船	ニウヨロクより五月五日入港
ヘロシチー船	ロンドンより右日
ラ子ルコスト船	右日
ハルリート船	箱坂より同月十日

三十三

ブラーへ船	カルジヒーより右日
ハム、エリサーベツト船	アムステルダムより同日十五日
ジヨンミルトン船	カビシヒーより右日
ガラースメール船	プレーモートより右日
デスハーチ船	兵庫より右日
アテン船	サンハイより同日廿一日

○
 総お佐世の密謀して佐倉炭山社に及ぶお成り藩の兵
 二百五十人程にて守備致居り此日日本兵隊
 へ何方の脱走りや心密に近辺徘徊し以て執佐

倉の藩士聞付に捕り執ちりしを脱兵の方へ逃れ
 聞へしりや去る十六日救済し人救お集め十七日未
 明迄のびやうに佐倉城へ押しよせ裏手より不意に
 大小砲打お討入り以て付城の守はく防戦し以て
 佐倉誓の小艇を船ト福澤ととり引とる脱兵の生れ
 以て城中の兵隊兵糧等を集め是又船を續て以て何方
 へ乗出し以て我れお知れざるとの様なり

是後佐倉の藩士引ぬし以て去る人もお手無き者
 城を守居り
 脱兵の多分小田原に集りしとる噂あり

已

○

此頃お豆、後の同陣の介務が安衛及性来出来居津
 城も落去し、^{ハコ子}函巖へも屯集せし兵あり、又小回系城も
 何とつ成りしるとまぢくの風吹るれど、先陣より
 長為江より川の満あり、へう通橋不便と、最なるれを何
 方より、も其報告来り、近日從説を以て、徳若も若ん
 方一大隊歩兵先陣脱走して野あま、あもむを、四月十
 九日、以て津官城を一子に攻むとし、其後、其礼して

何方も屯集せし、やねお、い、世節三百人、津隊長從
 本某を初め、大回系城へ攻よせ、官軍と戦多に、および
 必死の劇戦、い、い、遂に城を抜き、い、い、を、も、多、分、死
 傷、い、有、く、と、の、多、報、告、あり、又一脱、い、右、の、官、軍、白、旗、を
 出張、い、に、攻、よ、せ、城、を、抜、き、放、火、い、あ、し、い、如、く、も、負
 援、い、勢、い、多、く、故、軍、も、引、退、き、い、執、い、も、き、あり

○銃創の養生を怯むを戒め

或人正月伏見に戦多に、胸の左辺より脊中へかけ
 矢弾に、く、打、抜、き、し、が、幸、ひ、又、肺、勝、を、よ、け、た、り、坂、地、に
 一、あ、夜、療、用、を、加、へ、蒸、氣、和、い、く、十、日、を、経、く、東、為、し

医療曰十日にして脊口愈たり九十日にして胸創愈
ざれとも痛を患えたり快氣を任せ出節せんと試
み三里を歩きの石を片路を歩んと思ひ出し又三里
を歩かせしうばは日より尤の肩又痛を發せり医
刺せりこれと蒸まこと十余日にして治せばハ
ツプを用ゆとつぐも愈へば内かく快く又二里
計歩行し七日の痛を免ゆまこと再こして創口痛
を發し三日余を経て創傍は清肉一層を生じたりを
の時外医を請ふ示せし又全く歩行の故なりとつぐ
まより創口はハツプを何どこし藥湯にメルキを用

ひ^{コニニヤク}藥膏をわつと蒸し四五日にして肩の痛を治され
ぬ頻りに蒸まこと二十餘日にして大に快し医戒め
て曰くまき刺は貼まると膏藥をわつとし又これを
巻く又綿布をわつと巻くものを兒体を動かさしめざ
るが為なり起臥初揺まるとは治效を速まると能
は況んや歩まるとはわつと巻くやと実験まるとは
より遠くは今日百又十餘日にして未だ平愈せざ一日
門を出き痛十日治せ一日茶を拵き痛三日歇
まはを蒸を拵きれを或ひは五六日よりあり竟に終身
の患をちる戒めざるをんや

方今騷擾の世況創を彼らものまさふあからざし必
し少愈を算んご性命を乞つこころわら

